墓碑銘

御集墓碑銘　巻崎昭彌

東樹堂叢書

ビルマ
中華民国
朝鮮
東支那海
南支那海
フィリピン
マリアナ諸島
カロリン
ボルネオ
ジャワ海
バンダ海
印度洋
タイ
インドシナ
マレー
ニューギニア
ソロモン諸島
ビスマルク諸島
アドミラルティ諸島
ブレパリス北海峡
ブレパリス島
ブレパリス南海峡
マルタバン湾
ヤップ
ウルシイ
オレアイ
ペリリュー
ポートモレスビー
ポートダーウィン
ココス島
クリスマス島
サンタクルス諸島
ニューヘブライズ諸島
エスピリサント
エリス諸島
アバマナ諸島
ナウル
オーシャン
ラバウル
ツルブ
ラエ
フィンシュハーフェン
ニューブリテン島
ニューアイルランド島
ボーゲンビル島
ガダルカナル島
ニューカレドニア
ニューヘブリデス諸島
ニューカレドニア
ニューヘブリデス諸島
ニューカレドニア
ニューヘブリデス諸

墓碑銘

題字　保田与重郎

序

田中克己

この集は昭和十九年八月十五日にビルマのティディム附近で戦死したと、公報によつて伝へられた兄君を悼んで、弟なるわが友岩崎昭弥君が涙もて綴つた作品によつて成つた。私がこの兄弟の故郷なる彦根にゐた間はごく短かかつたが、ある日、昭弥君は私の宅へ来て、ビルマの地図を見せよといひ、見せるとさがしあててそこを指さして見せた。ビルマの西境チン丘陵を両断して流れるマニプール河の東岸の小さい町で、河に沿つて北に五〇キロもゆくとインドのアッサム州である。

昭弥君の兄君はこの町の北一〇キロほどのところで戦死したといふのである。

私はビルマについても、ビルマ作戦についても、なに一つ知りはしない。しかし戦争のはじめ行つたマライでは、後にこの方面の司令官となつた将軍の勇猛果敢だつたことだけは十分きいてゐた。ビルマ作戦が失敗し、インド進攻どころか、ほとんど全滅に近くなつて退却しなければならなくなつた実状は、戦後はじめて承知した。はじめから軍当局はそれを予想できなかつたのか。それについての弁解はききたくないが、軍当局にはその義務があるといま考へる。

辻政信氏の「十五対一」は再三読んで、同氏が軍参謀として、なすべきことはなしたとの説は承知した。はじめにインパール作戦に反対されたといふ小畑信良参謀長には、シベリ

アから帰られたあと、昨年はじめて十数年ぶりにお会ひできたが、その時は、ビルマ作戦についての御意見を承るひまをもたなかつた。

ともあれ岩崎君の兄君の出征は十九年の三月で、これはおろかなる我々が陥落まぢかにありと考へたインパール攻撃の開始された直後である。インパール作戦に最初参加したのは「烈」「弓」「祭」の三箇師団で、このうち「祭」は京都師団であつたが、インパール作戦難しとみてか、増援されたも一箇の京都師団「安」に、兄君が配属された。インパールにまでせまつた三箇師の運命は説くまでもない。その潰滅のあと、敵と対した「安」部隊も、同じく食糧弾薬の欠乏に、敵襲よりもはなはだしく悩まされた。戦線に加はつてから八月十五日まで、もし実際に生きてゐたとしたら、兄君はおそら

く半飢餓状態で戦闘しなければならなかつたらう。武器とても優勢な敵の火器、さらには飛行機戦車の攻撃に対し、ただ銃剣あつたのみであらう。

これは肉親として、硝煙弾雨に斃れられるより、さらにかなしい、いたましい戦の図である。昭弥君の詩には、この肉親の慟哭がよく描けてゐると思ふ。しかし文学的にどう描けてゐやうとかまはないと作者はいふであらう。ただ老母とともに、兄君の恋人とともに慟哭するだけで、気がすむのだと。思へば私も多くのよき友を失つた。肉親の慟哭はさらに声高いことを、この詩集は私にも思ひしらせてくれた。

ビルマにも、ガダルカナルにも多くの遺骨がその日のままに眠つてゐる。私どもは骨の納められてゐない墓を日本中のいたるところに見いだす。そしてその墓がみなそれぞれこの

やうな墓碑銘を刻まれてゐるのだ。字で書いてないのは涙痕もて刻まれてゐるのだ。そして字で書いた場合は、みなこれと等しい喞々たる響をつたへるにちがひない。それにしても昭弥君が兄君の死を聞いてから十年が経過してゐる。この長いあひだ彼はのみと槌とを打ちつづけて来たのだが、その手が血まみれになり、そのひびきで彼の心肝が凍らせられたことは、鈍い私にもよく感じとられた。兄君の霊がこの贈物を享けられんことを。

墓碑銘

兄に

——序詩——

お前の墓が出来た
十二年後になつたが許してくれ

祖国がお前の死んだビルマへ
遺骨収集に出掛けたのも此の春だ
むろん拾はれては来なかつたけど
家にはちやんと遺髪が残つてゐる
門出に言つた感激の言葉

萬歳　萬歳　天皇陛下萬歳！
入営して一ケ月目に
雨期のインパールへ送られたのだ
死亡公報にかう書いてある
　昭和十九年八月十五日
　ティディム北方約十粁に於て
　頭部腹部貫通銃創により
　壮烈なる戦死を遂ぐ
親切な嘘が今になつてわかつた
飢餓とマラリヤと赤痢に悩まされ
戦闘は一度もせずに退却して
戦友と一緒にのたれ死んだのだ

僕は生存者の一人に昨日会つて来た

痩せ衰へた二人の兵隊があふ向けて
土人の小屋で寝ころんでゐる
投げ出された跣足の蹠は変形し
泥と血にまみれて妙に青白い
「眠るなよ　眠るなよ」
「眠らないが眠い」
「眠つたらいかん眠つたら」
「眠らないが眠い」
「我慢しよう　もうすぐ誰かやつて来る」
日暮の風が仏のやうな二人の顔を撫でる

思ひ出したやうに懶い語調がつづく
「俺は志摩の波切だ　帰つたらうまい魚を喰はせる
から来いよ」
「俺は近江だよ　湖があつて　うまい米がとれると
ころだ」
「ああ　白米が喰ひたいなあ」
「喰ひたいなあ」
「みんなはどうした？」
「先に後退したよ」
「馬鹿いへ——
眠いのを我慢しとれば誰か来る」
「眠いなあ　眠い……なあ」

「眠うても眠るな　眠る……なよ」
遠くで忘れたやうに砲声が響く
日暮とともに深い深い睡りに
落ち込んでいつたのだ
中隊長戦死　中隊長代理戦病死
小隊長病死　小隊長代理戦病死
生存者は中隊中たつた四人だつた

インパールの南方一五八哩附近
ティディム北方約十粁の山小屋に
あの美しかつた二十才の肉体は
もう白骨となつてゐるといふのか

ゆふべの夢を
母が今朝話してくれた
骨だけになつた手で裏口の戸をあけて
「ただいま」といふお前の姿をみたと
今夜はその夢を僕が見るだらう
お前よ　あの日見送つてくれた
町の人々や親しい友達にだけでも
もれなく帰還の挨拶をしてほしいのだ

お前の墓が出来た
十二年後になつたが許してくれ。

インパール (1)

ビルマの皺に巨大な帯となつて走るチンドウィン河を
闇に乗じて渡河した川獺(かはうそ)群があつた
彼等はジャングル上の欠けた月を不気味に仰いだ
ときに昭和十九年三月十五日の夜十時
一群は　第十五軍「林」集団の兵隊だつた
――ヨーロッパでは
頼りだつた独逸軍も全滅の一歩手前で戦つてをり
太平洋では　マーシャル群島の守備隊全員が玉砕した

続くアメリカの機動部隊はマリアナ基地を嵐のごとく
　攻め
聯合艦隊司令長官は作戦指揮中に飛行機事故で　捕虜
　となつた
参謀達は救つた陸軍士官にその場で殺され、同じ場所
　で　彼は割腹自尽したのだが
真実は国民すべてが知らず　天皇陛下も御存じない
印度はコングレス（国民会議派）の点じた反英独立の
　火が炎となつて拡がり
チャンドラボースの率ゐる国民解放軍は
　チャロウ・デリー！（デリーへ進め！）
　ジャイ・ヒンド！（印度萬歳！）を叫び

酷熱のラングーンで祖国を指呼してゐた
だが　チン丘陵(ヒル)を御存じか
山系数百粁　標高一万呎に達するそれは巨人の背中
シーズン中の雨は地球上の首位をしめ
河川渓谷の氾濫で年々地形が改まる
市ケ谷の参謀達さへ迷ひ迷つた嶮難を
そして成吉思汗(ジンギス・ハン)さへ征服できなかつた蕃境を
南から　日本軍が彼等を率ゐてゆくといふ
無謀な？　いや雄大無比の主戦論者は誰なのか？
勇名は知らぬものない牟田口廉也軍司令官
支那事変を起し　マレー半島を攻略し　昭南島をつく
つた彼はいふ

「絶対優位な四辺の敵の反攻に守勢をもつてまもるは
不可
意表をつき急襲覆滅するのほかに軍なし」と
（無名の犠牲をいま考へてはをれぬのだ）
こちらには　だが憂ひ濃き老将軍の顔もある
「日本ならばアルプスの嶮を　越えて続かねばならぬ
補給法は？」
「敵の建設道路や軍用品の逆用と　精神力なる皇軍唯
一の武器もある
起死回生　断乎起(た)て！」と
鳥でもない　雲でもない　また風にもなれない兵隊は
思ひ思ひの新しい季節をひそかに願ひ

父母の育てたその肩に分解した砲身や砲車を背負ひ
原始の山を、来る日も来る日も踏破した
かくて四月上旬の晴れた朝
インパールの南十一マイルのビシェンプールの街を
はるかに見下す峡谷に立てた「弓」部隊の、軍旗！
「烈」部隊は　民衆を襲つては空腹を満してコヒマを
　攻め
底豆の足をひきずりひきずり　デマプールに向つて行
　軍した
　（もうすぐ　インパールなのだ）
このニュース　祖国へ向けては一語一語に力をこめて
　打電され

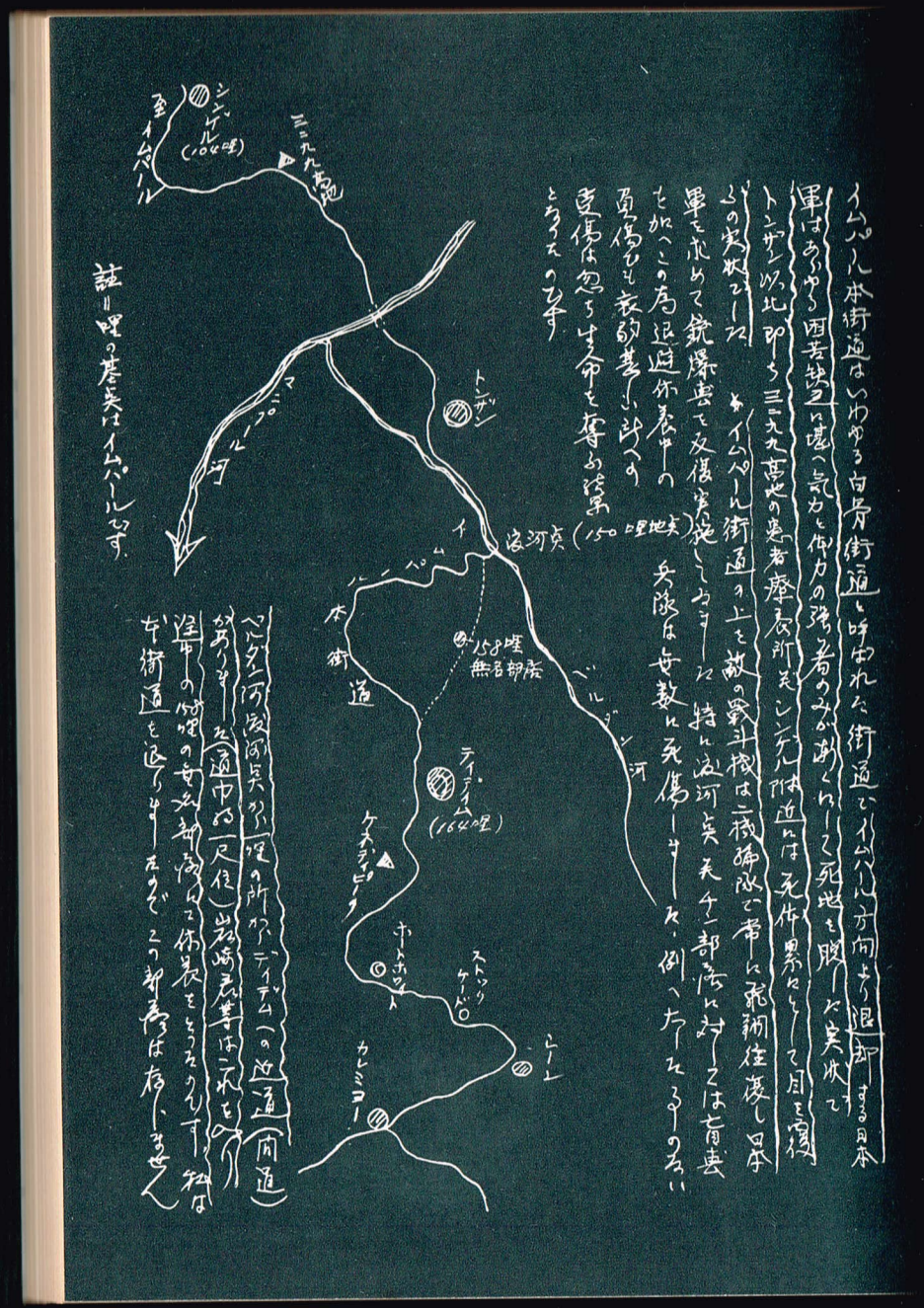
女のまじる黒い解放軍は、季節風のごとくティディム
　に急いだ
青葉のメイミョウーでは、ビールが飛ぶやうに売れた
街には、軍司令部があつたのだ
そこには「軽井沢」もあつたのだ

三月末に誰にも会はず故国(くに)を発(た)ち
四月の十六日に真夏のシンガポールに上陸
ブキテマ高地の競馬場にて部隊編成中の
歩兵一五一聯隊「安」一〇〇二二部隊が
「マンダレーに向ひ直ちに前進せよ」と
師団命令を受けたのは、八日目の暁だつた

闇を破つた喇叭にひととき渦巻いた黒い影
そして整列したものは

兵	二九一七名
機関銃	四七門
重機関銃	二四門
機関砲	二門
歩兵砲	六門
自動車	二一輛

火器が貧弱なのは一人一人が肉弾となり得るからだ
彼等はやがて長蛇となつて移動しはじめた
見送るものの誰一人ない丘に
祈るやうに夜明けの風が吹いてゐた。



――オフセット版は、元十五軍参謀高橋巖氏の調査依頼により、神奈川県民生部世話課に寄せられた杉本岩木氏の手紙（昭和三十一年四日七日付）の一部である――

岩崎正信　略歴

大正十二年九月十九日　彦根市古沢町九番地に生まる
昭和十四年三月　滋賀県立彦根商業学校中退
昭和十九年一月十五日　歩兵第一五一聯隊（久居部隊）に入隊
昭和十九年七月二十四日　アミーバ赤痢のため三九・一マイル地点より後退
昭和十九年八月十五日　ティディム北方約十粁に於て戦病死

あとがき

少年期は戦争の時代であり、青年期は戦後の時代であつたから、私や私達の世代は戦争の影響だけをうけて来たといへる。旧軍隊の経験をもつのも、昭和二年生れの私達までであらう。顧みるとあの恐しい戦争も、アジヤの平和と日本を護るためだといはれていた。私達もまたそのやうに考へ戦つてきた。私の一家も戦時中は母を残して、四人兄弟が揃つて兵隊にとられた。戦没したのは三男坊の正信だけだつたが、新聞で報ぜられるやうに、ビルマやマライや比島に生存者があるといふと、正信もあるひは生きてゐやしないかと思つたりもする。母にしてみればなほ更のことだらう。ともあれ戦後アジヤの諸国が独立したのを、せめてもの

なぐさめとし、再び戦争を起さない生きかたをしたいと願ふ。

詩に親しんでからほぼ十年になる。彦根に田中克己先生がをられて、毎日のやうにお訪ねしたころからである。はじめは戦後の社会について慨歎することが多かつたが、私はいつしか先生の詩のファンになつてゐた。戦前の詩誌「コギト」や「四季」を見せていただいたのもその頃のことである。岐阜に来てからは「詩宴」に加はり、また「コギト」「四季」の流れといはれる「果樹園」に加はつた。

ここに収めた作品の大半は、「果樹園」「詩宴」に発表したもので、兄正信を悼んで綴つたものである。彼は応召のとき「僕は死んで帰るだらう」といつた。出征してからの便りといへば、列車の窓から投げた走書だけであつた。そして昭和二十二年の春に一握の砂となつて帰つて来た。その頃はまだ戦後の混乱期で、

ビルマでの様子を知らうとして復員局を何度も訪ねたが、何一つ知ることができなかつた。昭和三十一年の春に政府がビルマへ収骨にゆくことになり、それが新聞に報ぜられてから、再び兄に関する調査をはじめた。最初にお手紙をいただいたのが、元参謀の後勝氏、それから後勝氏の紹介で知つたのがやはり元参謀の高橋厳氏、また高橋氏に紹介されて杉本岩木氏を識つた。後に杉本氏をお訪ねして、兄の死に至る詳しい話を聴いた。戦後、竹山道雄氏の「ビルマの竪琴」を愛読して、読むたびに泣いた。しかし私がこの集の詩を作りはじめたのは、杉本岩木氏の話を承つてからである。先に私も軍隊の経験があると書いたが、軍隊では飛行機つくりをやつただけなので、もつぱら書物に頼つた。ときにはそのまま引用したり、勝手に曲歪した恐れもあるから、つぎに主な参考書をあげて謝意とする。

服部卓四郎著「大東亜戦争全史巻四」

辻政信著「十五対一」
後勝著「ビルマ戦記」
高木俊朗著「イムパール」
竹山道雄著「ビルマの竪琴」
火野葦平著「青春と泥濘」

なほこの集の作品については、先輩知友から色々なはげましをうけた。特に保田与重郎先生からは題字を、田中克己先生からは序文を賜り、「果樹園」の小高根二郎先生、「詩宴」の殿岡辰雄先生、平光善久氏には印刷発行についてのお世話を願つた。

昭和三十四年三月

岩崎昭彌

目次

題字　保田与重郎
序　田中克己
兄に　―序詩―……8
昭和十九年三月二十五日……14
宇品にて……16
船団……18
波……21

引率外出……24
インパール(1)……26
ノンブラドック……34
白日……37
第一印象……40
牛……42
発病……45
大休止……46
ティディム……48
インパール(2)……50
ケネディーピーク……59
秋風……60

故国……62
断章……64
月明……68
道……70
赤い花……76
あとがき……80

詩集　墓碑銘　果樹園叢書
昭和三十四年四月八日発行
頒価　二〇〇円
著者　岩崎昭彌
印刷者　平光善久
発行者　小高根二郎
発行所　果樹園社
池田市野町一六八

経歴書

岩崎昭弥（いわさき しょうや）

昭和二年四月六日生（三十一才）

本籍　岐阜市早田一六四〇の十
現住所　岐阜市近ノ島　島荘二の十三

学歴

一、昭和二十年三月　滋賀県立彦根中学校卒業
一、昭和二十三年三月　彦根工業専門学校卒業（現滋賀大学経済学部）
一、昭和三十一年十二月　一級建築士資格取得

職歴

一、昭和二十三年四月　有邦建築株式会社に勤務
一、昭和二十五年十二月　合資会社河端組に勤務
一、昭和二十六年九月　岐阜市土木部建築課に勤務
市営アパート本郷荘・桜荘・正木荘、黒野・岩田坂・則武・島各市営住宅及び分譲住宅、納涼台、水道庁舎本郷・加納・白山・茜部・西郷各小学校、伊奈波・明郷・島各中学校増改築工事、茜部公民館、島中・薬大体育館、短大調理室、金神社社務所、保護司会舘新築工事などの設計及び監理をして現在に至る。

組合歴

一、昭和二十八年四月　岐阜市職員組合代議員
一、昭和三十年四月　岐阜市職員組合青年部執行委員文化部長
一、昭和三十一年四月　岐阜市職員労仂組合連合会代議員
一、昭和三十二年四月　岐阜市職員組合副執行委員長
全日本自治団体労仂組合岐阜県連合会執行委員
一、昭和三十三年四月　岐阜市職員組合執行委員長
岐阜市職員労仂組合連合会委員長現在に至る

その他

元　岐阜県建築士会評議員
現　岐阜市職員共済組合組合会議員
岐阜市職員健康保険組合理事
岐阜市職員福利資金運営委員
岐阜市職員共済組合生活資金運営委員
日本建築学会、岐阜県建築士会会員
岐阜県歌人クラブ、中部日本詩人連盟会員
雑誌「詩宴」「果樹園」「風日」同人
著書　歌集「桃」　詩集「中部日本詩集」に参加